基調講演
資源循環ビジネスにおける サーキュラーエコノミー・カーボンニュートラルへの展望

・日　時：令和５年６月１２日（月）
・場　所：名古屋国際会議場２号館１階
（２１１・２１２）
・参加者：１６６名 & YouTube ライブ配信
・講　師：細田 衛士 氏

◆講師プロフィール

1977 年慶應義塾大学経済学部卒業後、2001 年同学部長となり、2018 年中部大学創発学術院客員教授、2021 年同副学長、2022 年東海大学副学長に就任し、多々の役職・政府委員等を歴任し現在に至る。

講演をする細田講師

ー講演内容

1. はじめに

「地球の美しさについて深く思いをめぐらせる人は、生命の終わりの瞬間まで、生き生きとした精神力を持ち続けることができるでしょう」Rachel Carson 1907-1964

2. 歴史を振り返ると

「過去を覚えていない人は、過去を繰り返す運命にある」George Santanaya 1863-1952

3. 廃棄物処理ビジネスから資源循環ビジネスへ

「哲学者たちは世界をたださまざまに解釈してきただけである。しかし肝腎なのはそれを変えることである」Karl Marx 1818-1883

4. カーボンニュートラルへの対応

「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」F. Hegel 1770-1831

5. おわりに

「今日という日は、残りの人生の最初の日なのだ」Charles Dederich 1913-1997

１. では、経済産業省が 2022 年立ち上げた「成長志向型の資源自律経済戦略デザイン」は、外生的ショックにも強い、持続可能な資源循環利用の新しい経済（新しい資本主義）の在り方を示す概念として理解されているが、どう実行するのかが問われているとのことでした。そこで成長志向型の資源自律経済の確立に向けての問題意識について、資源制約・リスク、環境制約・リスク、成長機会について説明があり、資源自律経済の確立に向けた３つのギア（規制・ルール、政策支援、産官学連携）について具体例を挙げて話されました。Reduce、Reuse、Recycle、では、それぞれを深堀し、欠けている点として動脈経済・静脈経済の連携協力を謳っているが、静脈ビジネスの今後の発展・展開の見通しがあまりないので、静脈ビジネス事業者自身が作り上げ政府に提示しても良いのではないかとの見解を述べました。要点として動脈経済では資源は、素材や部品から、製品化されることにより密から疎となり次に使用済み製品となります。次に、静脈経済では使用済み製品を分別保管して一次資源とします。次に、疎から密にして二次資源とし、素材や部品とする。その資源は、また動脈経済の素材や部品となり循環のループとなります。

２. では、循環経済以前の歴史について振り返り、事例として「豊島事件」を機に、使用済み自動車リサイクル・イニシアティブが通商産業省（当時）より提示されました。これにより現「自動車リサイクル法」の下敷きとなる、関係各主体の連携による適正自動車リサイクルの促進や数値目標が定められ、やがて「自動車リサイクル法」となったこと等、３Rか

ら資源循環経済への道のりについての説明がありました。この単元のまとめとしては、

・分ければ資源、まぜればごみ➡３Ｒ➡循環型社会➡循環経済

・ハードローだけではなくソフトロー、といえる制度的インフラストラクチャーが整備されてきている。

・法制度の対象主体だけではなく、業界や市民も資源の循環利用の重要な主体として位置付けられているとのことでした。

３.では、見える付加価値（市場化できる付加価値）と見えない付加価値（市場化できない付加価値）は、相互につながっている、ＣＳＶ（Creating Shared Value：共通価値の創造）であり資源循環ビジネスが目指すところはＣＳＶであるとのことです。資源循環ビジネスについては、動静脈連携協力（ＳＤＧｓ１７番目のパートナーシップ）は道半ばであることからこれからの努力が必要であり、連携が進まなければＣＥ（Circular Economy：循環型経済）への移行が円滑に進まず、新しい付加価値が生まれにくいとのことです。その後、ＣＥの概要について説明があり、国の政策の変化として産業廃棄物処理業の振興方策について説明がありました。まとめとして、これからの資源循環ビジネスは、「ビジネスマインドの必要性」、「発展・成長戦略の必要性」、「産業の成熟化の必要性」、「俯瞰力・企画力・提案力の必要性」を挙げました。

４.では、世界のCO_2の排出量、主要国・日本の温室効果ガス排出量の推移について説明後、２０３０年までに２０１３年比温室効果ガス４６％減➡２０５０年までにカーボンニュートラル実現（静脈ビジネスも例外ではない！）という、どう考えても実現可能な数字ではないという説明がありました。そこで廃棄物分野における２０３０年度の目標の見直しについて、ロードマップの必要性について説かれ、収集運搬の徹底的な効率化、プラスチック資源のダイナミックな制御、静脈ビジネスの技術革新等、繰り返しＰＤＣＡサイクルを実践しても目標達成は困難であるとのことです。対策としては、協働によるシナジー効果を得るため、知識と知恵、循環戦略と戦術、管理と運営等を協働し、一人、一社でできないことが、二人、二社ならできるかもしれないという、多社が協働すれば新しい展開が期待できるとのことから、パートナーシップに着眼した循環ビジネスが面白くなるとのことでした。

５.では、資源循環ビジネスは私益と公益が調和し、ＳＤＧｓのトレンドは資源の高度の循環利用の重要性を表している。経済、環境・資源、社会のトリプルウインを目指す緑の資本主義の到来について、そしてＣＥは緑の資本主義の核心であるとのことです。最後に「昨日と同じ明日はない！」と述べ、２０５０年までに完全カーボンニュートラルの実現は非常に難しいが、世界への約束である以上静脈ビジネスも戦略的展開を行うべきであり、協働によるシナジー効果抜きでは達成しないと思われるため、ヨーゼフ・シュンペーター（1883-1950 オーストリア・ハンガリー帝国生まれの経済学者）の“創造的破壊”、“守破離”の概念で、カーボンニュートラルとサーキュラーエコノミー両立の新しい世界へ動くべきであると、聴講されていた会員の皆様の背中をポンと押されるようなメッセージで締められました。

質疑応答では、永井良一会長から、振興方策についてのご意見や、現場と法律についての質問等がありました。中野兼司副会長からは、インプットからアウトプットができる人材育成について、業界の今後の展望等についての質問がありました。

細田講師は、愛産協３０周年記念行事にて基調講演をお願いしておりましたが、コロナ禍により記念行事が開催されませんでした。そのような経緯もあり、待望の細田講師のお話しを会員の皆様は熱心に聞き入っていました。

質疑応答で細田講師に質問をされる永井会長

講演の様子